HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	'*Did Frank probably beat all his opponents?' の構造 : 発話における話者の心的態度の一貫性について (7)
Author(s)	葛西, 清蔵
Citation	北海道大學文學部紀要, 37(2), 53-76
Issue Date	1989-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33538
Type	departmental bulletin paper
File Information	37(2)_PL53-76.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

'*Did Frank probably beat all his opponents?' の構造

——発話における話者の心的態度の一貫性について——

(7)

葛 西 清 蔵

0・本稿は，葛西 (1981) をはじめとする一連の論文で主張してきたことを「前置」に限りさらに詳細に検討し，その主張の正しさを確認しようとするものである。

筆者は，発話には話者の心的態度がぬき出しがたく現われており，これは基本的には一貫していなくてはいけないものであることを述べてきた。その心的態度は，さまざまな形をとって現われてくるが，語順の移動もその一つであることをくり返し述べた。(1981), (1987) では，移動のなかでもとくに「前置」をとりあげたが，ここではこの点をもう少し詳しく検討し，一見「前置」と思われるものでも，実は移動されたものではなく，したがって，心的態度の表現とは考えられないものがあることを指摘し，結論として，発話においては，心的態度の一貫性が必要である，という主張は正当であることを示す。

まず1では，「前置」がたしかに，心的態度の表現であることを，他の心的態度の表現との共起関係によって確認する。2では，「前置」と一見思われるが，実はそうではない例などを，三つのタイプにわけて検討する。3はまとめである。

1.1 疑問，感嘆などというのは，話者の心的態度が表明される典型的な場合であるが，ここでも

1 a Will he come?
b How fast does he run?

c How fast he runs!

1で見るように確かに語順の移動がある。

2 a Nothing did I see that I liked.
b Under no condition may they leave the arena. —— Emonds

2a, bでは，よく見られる否定的な要素が文頭にある例であるが，これは話者が命題内容にある程度コミットしており，さらにその一部を優位にしようとしていることは明白で，ここには確かに話者の心的態度の表明がみられる。Kruisinga も語順を法性 (modality) の一つと位置づけていることは (1981) などでもふれた。

1.2 発話の中で心的態度が一貫していなくてはいけない，という筆者の主張からすれば，一つの発話の中に異った心的態度の表現があってはいけないということになるが，つぎに，語順が，他の心的態度の表現とどうかかわるか，これを見てみよう。

3 a ?* *Slowly* John *will* open the door
b ?* Dave *quickly may* leave the room.
c ?* *Carefully* Pete *should* creep out of room.
cf. a′ John *will slowly* open the door. —— 以上 Jackendoff

これらの文が非文となるのは，a, a′の比較でもわかるように，陳述緩和的 (又は認識的) な法助動詞があること，すなわち命題内容に対してある既然性かのべられている一方で，slowly という副詞の「前置」をすることによってもう一つの態度を表明しているからに他ならない。b, cについても同様である。

4 a* *Never* Bill *apparently* has seen anything to compare with that.
b* *So fast* Tom *probably* ran that he got Texas in ten minutes. —— 以上 Jackendoff

これは既然性を表わす法副詞と「前置」による態度の衝突である。

'*Did Frank probably beat all his opponents?'

5 a I wonder whether {*truly John / John truly} has lost his talent.

b She regretted that {*perhaps she / she perhaps} stayed late. —— 以上今井ほか

c {I swear / *It is likely} that never in my life have I borrowed money. —— N. A. McCawley

5の文はいずれも補文の中に語順の移動がおこっている。一方，主文について見ると，aではwhetherと補文内容を疑問視していながら，trulyをその補文内容に対して真と見る態度を表明しており，態度に一貫性がなく非文になる。trulyがJohnの後に来る例では非文にならないが，これはこの位置では多少その性格を失う傾向があるからである。副詞の位置による微妙な性格の変化についてはすでに (1986) でふれた。

bではthat補文内容に対してperhapsと既然性のひくい判断をしておりながら，一方ではそれを事実とみるregretという動詞を使っていて衝突がある。perpapsの位置についてはaと同様である。

cについては，補文に副詞前置があり，その内容にふかくコミットしていることを示している。したがってswearという補文内容に対してそれを支持する明確な態度を表わす動詞は似つかわしいが，弱い既然性を表わす法形容詞likelyは合わない。つぎの例はどうであろう。

6 a* Who into the house dashed?

b* Into the house who dashed? —— 以上 Emonds

c* Will Sam go where?

d* Did Mary see who? —— 以上 Culicover

e* Did among the guests sit John and his family?

f* Each part, how did John examine? —— 以上今井ほか

6a〜fはいずれも疑問という態度を表明していながら，さらに一部の語順を「前置」したために起っているために非文になっていることは，Who dashed into the house? とすることでa, bともに正しい文となることでも明白である。a, bともに疑問文という態度を一度表明した文の中から，ある

いは，中で要素を移動（「前置」）したため二つの態度が対立して非文となったのである。以下の文についても同様である。

最後につぎのような例についてみよう。

7 a* This shop into ran the dog.
b* Into the house the chairs the boys shoved.
c* Speaking to now the president is our top reporter.
—— 以上 Emonds

これらの文は Emonds が「ルート S」には「前置」移動は一回しか適用できないが，それが二度おこっているという理由で非文になった，としてあげたものである。われわれは，すでに「前置」は心的態度の表現であるとして来たが，ここではそれが二度おこり，一つの文中に異った心的態度がさらに表明されたために非文となった，と言えるものである。

このことを再確認するために，この種の二重の語順の移動が非文をつくることを純粋に統語的な面から網羅的に扱った中島 (1984) の場合を「前置」に限って見ることにしよう。

中島は，英語においては，移動現象はきわめて制限されているとし，それを，つぎのような「前置」の移動規則の共起関係によって示そうとする。彼のあげる規則は，疑問詞移動，話題化，Tough 移動，分裂化，関係詞化である。そして，8～11 のような例によって，これらの移動は一つのみ可能で，二つは許さない，とする。

8 a John told me who Mary gave the iguana to ____. (疑問)
b* Who did John tell you who Mary gave ____ to ____.
(二つの疑問)
9 a About the secret, John believes that Mary talked to Sue ____ ? (話題化)
b* Who, about the secret, does John believe that Mary talked to ____ ____ ? (疑問と話題化)
c* About the secret, who does John bilieve that Mary talked to ____ ____ ? (話題化と疑問)
10 a The table is easy to put the vase on ____. (Tough)
b* What the table easy to put ____ on ____ ? (Tough と疑問)

'*Did Frank probably beat all his opponents?'

11 a It was the professor of physics that John sent his paper to ____ (分裂化)

b* What was it the professor of physics that John sent ____ to ____ ? (疑問と分裂化)

われわれの問題にするのは中島のあげる移動のすべてはないが，これらは前方への移動が二つ同時におこることはないことをはっきり示したものである。彼はこれを「規則非両立現象 (RI : rule incompatibility)」という名称で体系づけている。

Emonds，中島は純粋に要素の左方への移動にかかわる統語的な現象として扱ったものであるが，われわれの立場からすれば，これらはすべて発話の中に異った心的態度の表現があってはならない，つまり心的態度が一貫しなくてはいけないことを証明する多くの場合のほんの一部にすぎない。

以上，他の心的態度の表現と共起することがないことから，文の要素の一部を「前置」することは話者の心的態度を表わす「法表現」であることは明白であることが確認される。

2.0 1では「前置」が発話の時の話者の気持のもち方，心的態度を表わすものであること，それが別の心的態度の表現と共起しないことを示した。ここでは，一見このことに反すると思われる例をあげて，その理由を検討してゆくことにする。

2.1 まず次の文を見てみよう。

12 Those petunias, { a what did Joanne do with them ? / b did John plant them ? / c when did John plant them ?

d Those carrot squares, eat them up. —— 以上 Rodman

これらの文は一見すると目的語 those petunias, those carrot squares が文頭にあり，しかも疑問文，命令文ということから，いかにも「前置」と疑問あるいは命令という二つの異った心的態度の表現があり非文になりそうに思われる。

しかしこの文では文頭の目的語が代名詞 them として後の文の中にある。

この種の文は，はやくは Jespersen によって「外置」(transposition)，今では「転位」(dislocation) といわれるものである。代名詞を残さず要素を移動してしまう「話題化」(topicalization) とはちがい語順はそのまま保たれており，Ross (1967)，Chomsky (1973) の一連の移動規則があてはまらないことはよく知られている通りである。

基本的な語順は守られているため，13 a～d は (あとで見るように) 実はこれは疑問，命令というそれぞれ一つの心的態度が示されているにすぎず，したがって非文とはならない。この種の文は当然われわれの検討の対象からはずれるものであることを確認しておくことにする。

2.2 13 の文を見ることにしよう。

13 a Who dashed into the house?
b* Who into the house dashed?
c* Into the house who dashed?
d Into the house ran the boys. —— 以上荒木

a は疑問という心的態度が一度だけ示された文で正しい文であるが，b, c は一度態度が示されたその疑問文の中の要素を「前置」した文では，すでに見たようにあらたな態度が表明されたことになり非文になってしまう。これはわれわれの主張に合う。

ところで，d は副詞句 in to the house の「前置」であり，さらに動詞 ran が主語 the boys を越して「前置」されているように見えながら非文になっていない。結果的には，副詞 (句) —述語動詞—主語名詞となっているが非文でないこの種の文はかなり多い。これがあとで検討する第一のタイプである。

つぎに 14 を見よう。

14 a* The other one for somebody else he bought yesterday.
b Yesterday the other one he bought for somebody else.
____ 以上松浪

a の文では目的語 the other one, 副詞句 for someone else の「前置」がつくり返されており非文になるが，b では副詞 yesterday, 目的語 the other

one の「前置」があると思われるのに非文とはならない。なぜであろうか。「前置」されたと思われる副詞（句）の種類と位置に関係がありそうである。13 b の場合とはちがい，主語—述語動詞の位置はそのまま守られている。これが第二のタイプの文である。

つぎの 15 はどうであろう。

15 a The play where did you see?
b The play did you see? ____ 以上福地

a, b の文で the play はたしかに see の目的語にあたるものである。しかも疑問文である。the play が「前置」されて文頭にあるのだとすると，これは疑問文と「前置」という異る心的態度の表現が衝突して非文になるはずである。これが非文とならないのは一体どういう理由によるものであろうか。これが三つのタイプである。

以上三つのタイプの文が，「前置」と思われるものと，もう一つの別の態度表現を含みながら非文となっていないものである。この種の文はすべてこの三つのタイプのいずれかに含めうると考えられるので，以下この三つのタイプについて非文とならない理由を検討していきたい。

2.3 まず一つめのタイプから見ていくことにしよう。

16 a Into the house ran the boys. (=13 d)
b The boys ran into the house.

a の文は副詞句，動詞と二つの「前置」があるように見えながら非文にならないのは何故だろうか。この文には異つた心的態度が表明されてはいないのだろうか。

a は，b の通常の「愛好される (favorite)」語順の文に比べて，語順が全く逆になっているにもかかわらず正しい文であるとすれば，b とはちがう明確な存在理由があるはずである。それは，よくされるように，孤立した単独の文としてではなく，特定の文脈を考え，一つの情報構造として見ると，はっきりして来ると思われる。それぞれの文の要素の性質を検討していくことにする。

bは，特定の少年たちについて，彼らは走ったが，それは「家の中へ」であった，と述べているが，aでは全くちがう。「家の中へ」というのは既に了解されていると考えられており，そこへ走っていたのは「その少年たち」だったと述べている。情報構造として見ると伝える情報の性質が全くちがうものであって，bが一つの文として独立させて不自然ではないが，aは談話の一定の文脈に入れた時に自然な文としておさまる。

いくつかの類例をあげてみよう。

17 a Into the house ran John.
b Down the hill rolled the carriage.
c On top of the hill stood an old mansion.
d Into the river was thrown an innocent bystander.
e Out of the court room will walk a judge.
f Near him stood John.
g Beside him were standing some of his best friends.
—— 以上 Rochemont

これらの文の性質を順次検討することにする。

まず，文頭にあるのはすべて「場所」を表わす副詞句である。それだけではない。

a～eの例で見る通り，すべて the, that を含み，f, g では him という代名詞を含んでいて限定性がつよい。これは極めて示唆的なことである。英語においては，一般的・総称的なことをのべる文でない限り，文頭に「定的」(definite) で，既知的な情報を伝えるものが主題として来るからである。その意味で，これらの副詞はまさしくその条件を満している。形としては，すべて，前置詞—名詞という単純なもので，意味上は他の部分に比較して重要な役割をになっているとは思えない。

つぎに動詞についてみよう。すぐ注目されるのは，動詞はどれも単純な動作・状態を表わすものだ，ということである。しかも，直接知覚できる種の動作・状態をそのまま述べたものである。このことは，つぎの 18, 19 の文と比較すると明確になる。

'*Did Frank probably beat all his opponents?'

18* Up the street *slowly walked* the procession. —— 福地

19 a* On to the street *would have run* a child.
b* Down the hill *has rolled* the carriage.
b′ Down the hill *rolled* the carriage. (=17 b)
c* In the garden *has walked* an old lady. —— Rochemont

18, 19 の非文を見ると，はっきりした共通の性格から見られる。18 では動詞に slowly という副詞がついておりこの部分の情報量がふえており，19 a～c では，それぞれ would have run, has rolled, has walked といずれも相的 (aspectual) にも，単純形 (simple form) とはちがう情報を含んでいる。単純形とはちがう情報は副詞的な語彙，あるいわ助動詞によっているが，これらが文の中で，述語動詞の部分に「意味的な卓越さ」(semantic dominance) を与えていることに特に注目しておきたい。

最後に文尾の主語の部分についてみよう。

一般に文尾は，話者がきき手に最も伝えたいと思う新しい情報が前景的に示されるところである。17 の例で見ると，John, the carriage, など固有名詞，定冠詞のついたものなどきわめて「定的」なものから，an innocent bystander, some of his best friends とそうでないものがあり「定性」(definiteness) については一定しないが，新しい情報をになっていることは共通している。これがこの文のポイントになっていることはつぎの文でも明確である。

20 a* Into the house ran *he.*
b* Out walked *she.* —— 以上 Rochemont

文頭の副詞 (句) にも，つぎの動詞にもこれらの文を非文とする理由はない。非文の理由は，文尾の主語が旧情報しかになえない代名詞であることである。このタイプの文において，動詞のすぐあとの主語が新情報として最も重要であるかは，それらの主語のあとに何かさらに新しい情報を伝えると思われる要素が来るとすべて非文になってしまうことによって知れる。

21 a* Into the class room ran John *late.*
b* Our walked Mary *in time.*

c* At the end of the lake stood an old mansion *only recently*.
d* In the garden walked an old lady *her dog*.
d′ In the garden walked an old lady. —— 以上 Rochemont

a, b, c では副詞的な要素，d ではあらたな her dog が目的語として文尾に新しい情報をになうものがつけ加えられたために，もはや主語の部分から優位さをもたなくなってしまい非文になったものと考えられる。

これで，このタイプの文の性質が明らかになる。すなわち，統語的には，副詞的な要素—述語動詞—主語名詞となって，通常の語順とは逆になっており，二つの移動があるようになっているが，文脈を考慮した情報構造としては，「旧—新」となっており，ごく一般的なものである。

この文頭の既知で背景的な情報の部分は，きき手にも了解されていると考えられるもので，これを指示的な there で言いかえることができる，というのはよく知られている。

22 Down the street there ran two joggers. —— Newmeyer

この there は当然 down the street を指しているにちがいなく，この there が「省略」されて，われわれが問題にしている文が導かれる，という説明もコミットする理論によっては考えうるであろう。

ところで，いま 22 の文を文脈から切りはなして，Down the street を文尾に移動すると 23 になる。

23 There ran two joggers down the street.

この文は 24 の文と以外に距離が近いことに思いあたる。

24 a There was a horse near the river.
b I saw a horse near the river.

24 a の was を ran にすれば 23 の種の文になりうるし，この「存在文」は 24 b の知覚文にも直接ふかいつながりをもつものであることは一般に認められている。大体存在しないものは直接知覚することは出来ないであろう。「存在文」が直接知覚されたものをそのまま述べた構文であるが，このことは，

このタイプとしてあげた例文の動詞 run, stand, roll, walk は「存在文」に現れうる動詞そのままであるし，相とくに完了相の助動詞が現われないことも，いかにも「場面を見たまま表現」した文であるように思われる。

こう考えると，この種の文はむしろ「存在文」との関連でとらえるとわかりやすい点があるようである。たとえば，

25 a There was a black horse running near the river.
b A black horse was running near the river.
c Near the river was running a black horse.

25 a を 24 b から「変形」によって，統語的に導きだすかどうかは理論上の問題であって，今われわれにはかかわらない。ここでは 25a, b が確実に異る情報構造をもっており，今問題にしているタイプの文は「存在文」と場面描写としては，したがって，おそらく認識的意味においても大して異るものではないこと，このことに注目すべきであろう。結局，

26 a Into the house ran John. (=17 a)
b John ran into the house.

26 a は，into the house を既知の古い情報として文頭におき，John を文尾に新情報として前景に出している，情報構造としては「存在文」と同様，それなりに安定した構造である。統語的には，26 a は，文脈からはなれた通常の文 26 b に比べると，into the house を「前置」してはいるが，(ran が「前置」されているのではなく) John が文尾に移動されていることになる。「前置」が二つくり返されているわけではない。一度の「前置」という統語上の理由，情報構造として安定した自然なものであること，これらの理由によって，このタイプの文は非文とはならないのだ，と言えよう。

2.4 つぎに二つめのタイプについて考えてみよう。

27 a* The other one for somebody else he bought yesterday. (=14 a)
b Yesterday the other one he bought for somebody else. (=14 b)

この二文から，副詞の種類と位置が関係ありそうだ，と述べておいた。aでは the other one, for somebody else が「前置」されており，異った心的態度が表明されているため非文になると考えられる。一方，bでは the other one が「前置」されていると考えられるが，文頭には yesterday がある。a, bとも目的語 the other one については共通であるから，副詞(句) for somebody else, yesterday の差と位置が非文の理由になっているということになる。28を見よう。

28 a Yesterday in the park John kissed Mary.
b The other day in Sheffield I watched an interesting new process. —— 以上松浪
c Yesterday at the inn, I met a gentleman. —— Rochemont

ここでは，yesterday, the other day という「時」を表わす副詞(句)が文頭にあり，さらに in the park, in Sheffield, at the inn という「場所」を表わす副詞(句)が続く。もしこの各文の二つの副詞(句)が「前置」されたものであるとすると当然非文になるはずである。

27 b, 28 a, b, cを比較してみると，共通しているものは「時」の副詞(句)が文頭にあること，つぎに目的語にしろ，「場所」の副詞(句)にしろ，もう一つの要素があることである。(そのあとの語順がかわらないことはすでに見た通りである。)目的語は通常の位置から「前置」されたものであることは明確である。もし28の in the park, in Sheffield, at the inn もおなじ性格をもつものであるとすると，27 b, 28 a, b, cが非文になっていないのは，この部分だけが一度「前置」されているだけで，「文頭の副詞は「前置」されたものではない」のではないか，という予想をたてることができる。以下このことを検討する。29をみよう。

29 Yesterday, what were you raving about? —— 安井 (1987)

この文は重要である。yesterday が文頭にあり，(コンマがあることにも注意したい) しかも疑問文でありながら非文にはならない。もし文頭の yesterday が「前置」によるものとすれば，あとの疑問と心的態度の衝突がおこり

当然非文になるはずのものである。what 以下が疑問文で一つの態度が表明されているのは間違いない事であるから,「文頭の yesterday は移動によるものではない」, つまりもう少し一般化して言うと,

30 文副の「時」の副詞は「前置」によるものではなく, したがって心的態度の表現とはならない。

ということになる。27 b, 28 a, b, c, 29 が非文でないことはこれで説明できる。

しかし, なぜ「時」の副詞なのであろうか。つぎの例を見てみよう。

31 a In Ben's picture of her, how does she look?
b In Ben's family, who is the genius?
c In her latest letter, what does she talk about?
—— 以上荒木

これらの文が 29 とちがうのは, 文頭の副詞が「場所」をさすものである, ということだけである。このことから, 文頭の位置でも非文をつくらない副詞は,「時」,「場所」を表わすものということになるが, つぎの 32 は, それ以外のものでもよいことを示している。

32 With her new job, can she spend more money? —— 荒木

文頭の副詞類は「時」,「場所」をさすものに限らないことになるが, 31, 32 と類似しておりながら非文になる 33, 34 のような例がある。

33 a* In Ben's picture of her, what did she find?
b* In Ben's office, who spent a lot of time? —— 荒木
34 a* In Ben's picture, did Rose find a scratch?
b* With her boss, does she argue? —— 荒木

31, 32 と 33, 34 を比較すると, 33, 34 が非文になる理由は文頭の副詞句自体にあるのでないことは明白である。とすると, あとの疑問文との関係に問題があることになる。これには, つぎの例が参考になる。

35 a He put the car into the garage.
b*? He put the car.

35 b が非文なのは，この文は情報不足で文とならないからである。ちょうど *a paid job (a well-paid job), *a worded letter (a beautifully worded letter) のように put には「場所」を表わす付加語が必要なのだがそれが欠けている。

結論を先取りして言えば，これと全く同様に，33, 34 の非文では，動詞 find, spend, argue がどうしても副詞的な付加語を必要とする種類のものなのである。この間のことは Reinhart に詳しいので議論はそちらにゆずるが，非文かどうかの基準は，「文頭の副詞が，その文の動詞にとってどうしても必要なものなのかどうか」ということなのである。別の言い方をすれば，文頭の副詞がその動詞を「下位範疇化」するものであるかどうか，ということである。31 a では，in Ben's picture of her が，how does she look? の look にとって必らずしも不可欠な要素，つまり「下位範疇化」する要素ではないが，33 a では find にとって不可欠な要素なのである。

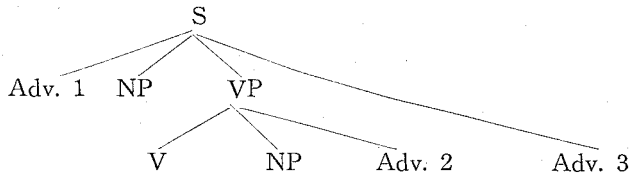
もともと，語順が固定していることがその一つの特徴である英語では，関係のふかいものほど互に近くの位置を占めるのが普通である。たとえば Nakajima (1982) は動詞に対する副詞の関係のちがいを 4 段階に分け，その副詞が占める位置に厳しい制限があることをのべている[2]。ごく一般的な例をあげてみよう。

36 a ____, John ____ has ____ been ?? answering questions for an hour, ____.
b John × would × have × been ____ questioned/inquired ____ by the police ____. —— 岡田

36 a は，いわゆる文全体を修飾する文副詞 evidently が現われうる場所を，36 b は動詞にかかる様態の副詞 intelligently が現われうる場所を ____ で示したものである。一見してわかるように，文副詞は文頭をはじめとして，かなり自由に現われるが，動詞にかかる副詞は動詞の近くのみで文頭近くには現われない。もしこのことをかんたんに図で示すとすれば 36 のようになるであろう。

"*Did Frank probably beat all his opponents?'

37



VPに直接支配されたAdv. 2はVを「下位範疇化」する副詞でありもともとこの位置から動きにくい，がSに支配されているAdv. 1やAdv. 3は文を修飾するもので現われる場所が（とくに動詞を目的語の間をのぞき）比較的弾力性がある。

もし今，移動しようと思う要素が文を修飾するかなり自由に文のいろいろな位置を占めうるものであれば，その要素の移動それ自体は大して重要な意味をもたないであろう。しかし，もしそれが動詞にふかくかかわっていて移動しにくい要素であれば，敢てそれを移動することは，なにかそこに話者の特別の意図が表わされているにちがいない。「前置」が話者の心的態度の表現だ，というのはこのことである。移動しにくい場所に移動するほど明確に態度を示したことになるだろう。(許される程度内であるかどうかは別にしても)。

二つめのタイプの文が非文とならないのは，疑問，命令の文であるにもかかわらず，文頭の副詞（句）が文を修飾するものであって，「前置」によるものではないからである。いわば「場面設定」(scene-setting), event modifier[3] としてあるのであって，そこに話者の特別な心的態度が表明されているわけではない。Emondsの「ルート変形」は一度に限るという主張は純粋に統語的なものであるが，この意味でもいかにも示唆にとんだものである。

このタイプの終りに補足的につぎ例にふれてみたい。

38 a* In Ben's picture of her, did she find a scratch?
b In Ben's *most recent* picture of her, did she find a scratch?

37 aは今まで見た理由で非文であるが，文副詞にイタリックのような修飾語がつくと非文でなくなる。修飾語がついても統語的には影響ないわけだか

ら意味的な理由ということになるが，これは結局情報量の多さの問題だと思われる。「不定」であったり情報量の少いものは一般に主題にはなりにくいものであるが[4]，ここでは修飾語がついたために情報量がふえ，相対的に背景的になって情報構造として不自然でなくなる，したがって非文でなくなるという，この種のタイプには，文頭の副詞の動詞との関係ばかりでなく，その副詞の情報量もかかわっていることを示す興味ぶかい例である。

2.4 最後に三つめのタイプについて考えてみよう。

39 a The play where did you see? (=15 a)
b The play did you see? (=15 b)
c Tom does Mary like? —— Rochemont

すでに見て来たようにこれらの文は以前の二つのタイプとはちがう。われわれの主張では，この文は確実に異る心的態度，目的語「前置」と疑問文があり非文になるはずのものである。現に Geis は，この文はほとんどの人にとって非文法的だといっている。この文が疑問文であり，そこに一つの態度が表明されていることは明白であるから，もしこの文がいくらでも許容しうる文である可能性があるとすれば，その理由は目的語 the play, Tom があるいは「前置」によるものではないのではないか，あるいは，このタイプに限る特別な理由があるのではないか，ということになる。以下この点について考えていくことにしよう。

このタイプの文は，統語的にはいわゆる話題化 (topicalization) によるものとされており，目的語を話題として文頭に出したことになる。新情報が「～については」という形で話題になることは非常にまれで，話題として文頭に出るのは一般に古い情報である。39 a で言えば the play が動詞のあとの目的語の位置から文頭に「前置」されたのだとすると[5]，この the play は文尾で新しい情報をになっている筈のものである。それが古い情報が占めるべき文頭の位置に来ているわけで，この点からもきわめて不自然と言わなければならない。この文は，つぎの，

40 Those carrot squares, eat up[6]. —— 安井 (1987)

40の文と類似は否定出来ない。まず文頭に目的語に相当するものがあり，あとには，はっきりした一つの態度表明（この場合「命令」）がある。しかも，左方転位の様に，あとの文に them という代名詞があるわけでもない。これらの点からすると40の文は，

41 a Restaurants, the situation's hopeless in Chapel Hill.
b Speaking of Santas, what did you bring for Christmas?
—— 安井 (1987)

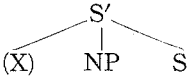
41 a の文に関係がある。文頭に名詞があり，それと同一指示の代名詞があとの文中にあるわけでもない。40とちがい，この文で一つの明白な点は，41 a の文頭の restaurants は「～はと言えば」ほどの意味で，新しい話題を導入するものであることである。41 b では，「～はと言えば」の部分を明示的に表わしたもので，とくに a, b に違いがあるわけではない。ところで41の文はつぎの

42 Those carrot squares, eat them up. (=12 d)

42の文につながるものである。これこそ典型的な左方転位の文である。文頭にあるのは新しく導入された話題であり，あとに同一指示の代名詞がある。一般にこの移動は「写し出し」(copy) によるものとされているが，Rodman は（詳しい議論ははぶくが）文頭の話題はのような句構造規則で，最初から文頭にあるとする。

43 a $S' \longrightarrow (X)\ NP\ S$

b



X: speaking of, as for

S の前に NP が S に直接支配される形で派生される。X の（ ）に注目したい。speaking of, as for はかならずしも現われる必要はない。「写し出し」による左方転位ではないから代名詞をもっている必要はない[7]。これらの点からすると Rodman の提案はわれわれの議論にはきわめて都合がよい。すなわち，

44 a The play did you see? (=39 b)

b　Those carrot squares, eat up.　(=40)
c　Those carrot squares, eat them up.　(=42)

話題化によるとされる文44aは44bのような中間的な性格の文を仲介にして，実は44cのいわゆる左方転位の文とかかわりをもつものであることがわかる。話題化と左方転位はどうやら統語的には截然と区別できるものでなさそうである。

しかし，情報構造としてはこれはどういうことを意味しているのであろうか。もし，44aの文頭の the play が話題化によるものとすると，本来新しい情報たるべきものが，古い情報として文頭に出されたことになり不自然であることはすでにのべた。ところで44a, b, cの関連性を見てみると，44aがほとんどの人に非文法的でありながら，許される可能性があるとすれば，それは44aの古い情報をになうとされる the play は実は，左方転位による44cの文頭の those carrot squares と同じように新しい話題としての性質をもたされているからではないか，ということになる。44aが非文法だと認めながら，「前置された句が導入 (introduce) されつつある時」に限り，この文が使いうるという時，この「導入」という言葉は，「新しい話題として導入する」ということに他ならないことになる[8]。福地が，「話題化と左方転位も談話構造上のはたらきについては，それほどちがいがあるわけではない」といういい方はここでも正当である。

三つめのタイプの文は一方で非文法的であるといわれるほど無理な構造をもちながらも，かろうじて許容しうるのは，情報構造としてみると，文頭の名詞が（通常の話題化とはちがい）新しい話題の導入という役割を負わされ，結果的には，全体として，話題—題述（あとの文）という一般の情報構造をつくるからに他ならない。

3.　最後にまとめと，補足的な説明をすることにする。

1では，「前置」が心的態度の表現であることを確認した。

一つの文の中に異った心的態度の表現があると，発話時の話者の態度に一貫性がなくなり，非文となってしまうことを，一部の要素が「前置」された上にさらに他の法表現がつけ加えられた文でたしかめた。「前置」と他の法

表現との共起関係をみると例外なく非文となる。また二つの「前置」が一つの文で共起することもないことから，「前置」は確実に，話者の心的態度を表わす法表現であることが示された。

つぎに，2では，一見「前置」と思われるものと，もう一つの異る法表現が共起していながら，非文とならないか，許容されている例を三つのタイプに分けて，その理由を検討した。

第一のタイプは，Into the house ran the boys. とその類例である。この文は into the house, ran がつぎつぎに「前置」されたものではなく，情報構造から見ると，古い情報 into the house を話題として文頭に「前置」してはいるが，the boys は新しい情報として文尾に移動されたものであるとのべた。この構造は「存在文」に似た性格をもつ「提示文」とみられるものでそれなりに安定したものである。「前置」一度と，後への移動（「後置」）があり，統語的には語順は大幅に変っているが旧新という安定した情報構造をもっているために許容されている。

第二のタイプは，Yesterday the other one he bought for somebody else. に類するものである。ここでは yesterday, the other one という二つの「前置」があるのではないか，ということを中心に検討した。そして，これは Yesterday, what were you raving about? の例から，文頭の yesterday は，いわゆる文全体を修飾するもので，場面設定的で，文頭にあるのが自然であること，一方 the other one は動詞にはどうしても必要なものであり，動詞を下位範疇化する類の副詞とおなじく，動詞句に支配されているものであり，この種の要素の移動は確実に「前置」であり心的態度の表現になることを示した。心的態度の表現としての「前置」が二つあるわけではなく，非文とはならない。

第三のタイプ，The play did you see? の類の文は微妙である。ここには確実に「前置」と疑問と二つの異る態度表現があり非文となるはずであり，現にそう認められている。しかし許容されることもあるというのは何故か。検討の結果，一般的には話題化は，古い情報として文頭に出されるのだが，この文では，新しい話題として文頭に導入されて来た，と考えるよりこ

の文を許容する方法はないことを示した。

これらの三つのタイプは，要素の移動の性質がそれぞれに違っており，文頭の yesterday のような動きの範囲が広いもの，動詞を下位範疇化する目的語，副詞など動きがきわめて限定されているものなどがある。許容される範囲内での移動は特にそれとして注目する必要はないが，通常の語順を著しく変える（つまり許容の範囲を越えるような）移動は，そこに話者の何らかの意図が明白に表わされている。「前置」は確実にその一つである。有標の話題とか無標の話題とかという用語は，この二種の移動のうち話題化について言ったものであると言える。われわれの主張の趣旨から，有標の二つの話題化があれば非文となるのは当然である。

ときには非文とされるほど語順が変った場合でも，微妙に許容される例もあるが，それは，旧——新という情報構造の基本に沿っていると解される時に限られている。すなわち，一つの文が非文であるかどうかという度合と，その文が談話の中で許容されるかどうかということは情報構造としてどうであるかということは非常にふかい関係をもっている。危険を冒して簡単に言えば，一つの文の許容度は統語構造上の正当さと情報造上の正当さのダイナミズムによってきまる，と言ってよいかも知れない。Halliday に沿って言うならば，筆者の心的態度の一貫性は「観念構成的」(ideational) な面と「対人的」(interpersonal) な面から論じられて来たが，ある特定の文が文脈の中で許容されるかどうかということは，今まで見て来たように「談話構造的」(textual) な面につよく影響される，ということになろう。

しめくくりに，もう一つのことに触れておきたい。

われわれは議論の途中でつぎのような例をあげた。

44 a* Up the street *slowly walked* the procession. (=18)
b* At the edge of the lake, stood an old mansion *only recently*. (=20 c)
c* In Ben's picture of her, did she find a scratch? (=38 a)
c′ In Ben's *most recent* picture of her, did she find a scratch? (=38 b)

a では the procession が新で伝えたい部分なのだが，動詞に修飾語 slowly がついたために情報量がふえて，procession と衝突するため非文となり，b では新となるはずの an old mansion の後にさらに新となる副詞が来てしまったための非文となっている。c では，動詞を「下位範疇化」する副詞が文頭に「前置」されたために非文となったものだが，c′はその部分に修飾語がついて情報量がゆたかになり，新しい話題として適切になって，相対的に許容できる文になっている。

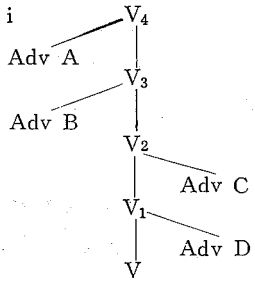
このように各要素の情報量は情報構造の容許度とふかいかかわっており，大きな影響力をもっていることがわかる。文というものがもともと孤立してあるものではなく，具体的な脈略の中で使われるはずのものであれば，糸口になる話題の部分とそれについてのべる新しい（と話者が考える）伝えたい内容の題述の部分へと情報量がふえていくのが自然の形である。(しかし一方では，いいたいことをまず言う[9]，というように新を出すのもそれなりの理由がある。)

本稿の目的は「前置」が心的態度であるかどうか問いなおすものであった。「前置」は明白に心的態度の表現であると示した後，心的態度の面からは非文と認められるものも情報構造という点からある場合に限って許容される場合もあることを知った。しかしこれは，その種の文で情報構造としては許容されることもある，という「もう一つの条件」を示したものであり，筆者の主張に影響を与えるものではない。本稿は，全体を通じて脈略，情報構造という言葉を多用してきた。これはその性質上自然なことである。筆者は (1981) 以来「心的態度の一貫性」の必要を主張する一連の論文で，その副題に「文における」ではなく「発話における」という言い方をして来た。当然のことだが，孤立した文だけから決して言葉の本当の姿はとらえられないとの趣旨からである。

注

1)「左方転位」では移動ということになろうが，あとで見るように，もともと文頭にあると考えることもできる。

2) i



ii Adv A : speaker's attitude, opinion, judgement
fortunately, surprisingly, ...
Adv B : probility of truth of proposition
probably, maybe, evidently, ...
Adv C : Adverbs of time, frequency, ... place.
Adv D : manner adverbs

これらの間には iii のような順序の制限がある。

iii a Fortunately, he had evidently had his opinions of the matter. (A—B)
b* Evidently, he had fortunately had his opinions of the matter. (B—A)

3) Geis, M. L.

4) i a? A doctor is John.
b? A tall man is the captain.
c? Such a nice guy is John. —— 以上福地
d* Someone, he is coming.
e* A boy, I saw him.
f* Few people, they will understand this thesis. —— 以上安井 (1987)
g* Many boys, Sarah Bernstein would like to kiss them. —— Rodman

5)「話題化」では移動された要素のあとに音声上の切れ目がないのが普通である。
cf. 福地 p. 77.

6) Rodman, 今西, 荒木は非文としている。その場合それは筆者の主張の上にのべた Geis とおなじ理由によるため問題とならない。非文でないとすると 39 が許容されるのとおなじ理由によるはずで，以下許容の可能性ある文として論をすすめる。

7) Rodman, '... although the proposition following the initial referent usually contains a coreferential pronoun, it sometimes does not.'

8) Geis, cf Keenan and Schieffelin, 'In many cases, the speaker uses the "Referent+Proposition" construction to INTRODUCE discourse-new referents.'

9) Mathesius, 'First the speaker impatiently states the new element of the intended statement and only afterwards adds the known element from which he actually starts' これはまさしく分裂文にあてはまる。
Akmajian, A. et al. (1979) "The Category Aux in Universal Grammar" *LI* 10-1.

参 考 文 献

荒木一雄 (編) 『英語正誤辞典』 研究社出版.

Baltin, M.. R (1985) *Toward a Theory of Movement Rules* Garland Pub. Ins.

Chomsky, N. (1973) "Conditions on transformations" *A Festschrift for Morris Halle* (eds.) Anderson, S. and Kiparsky, P. Holt, Rineharst and Winton.

_____ (1988) *Language and Problems of Knowledge* MIT Press.

Emonds, J. E. (1970) *Root and Structure-Preserving Transformation* Ph. D. Dissertation MIT Press.

福地 肇 (1985) 『談話の構造』 新英文法選書, 10, 大修館.

Geis, M. L. (1986) "Pragmatic Determinants of Adverb Preposing" *Papers from the Paracession on Pragmatics and Grammatical Theory CLS* 22-2.

Greenbaum, S. (1969) *Studies in English Adverb Usag'e* Longman.

Gundel, J. K. (1988) *The Role of Topic and Comment in Linguistic Theory* Garland Pub. Inc.

Halliday, M. A. K. (1967) "Notes on Transitivity and theme in English" Part 2. *J. of L.* 3.

Huntley, M. (1982) "Imperatives and infinitival embedded questions" *Papers from the Paracession on Nondeclaratives* C.L.S.

今井邦彦ほか (1978) 『現代の英文法』 文II 研究社.

今西典子「左方転位と話題化について: 基底部規則における TOPIC 節点に関する考察」英語学論説資料 20.

Jackendoff, R. S. (1972) *Semantic Interpretation of Generative Grammar* MIT Press.

Jespersen, O. (1971) *Essentials of English Grammar* George Allen and Urwin.

葛西清蔵 (1981) "*Did Frank probably beat all his opponents?" の構造. 北大文学部紀要, 30-1.

_____ (1984) "*Did Frank probably beat all his opponent?" の構造 (2). 北大文学部紀要, 32-2.

_____ (1985) "*Did Frank probably beat all his opponents?" の構造 (3). 北大文学部紀要, 33-2.

_____ (1986) "*Did Frank probably beat all his opponents? の構造 (4). 北大文学部紀要, 34-2.

_____ (1987) "*Did Frank probably beat all his opponents? の構造 (5). 北大文学部紀要, 35-2.

_____ (1988) "*Did Frank probably beat all his opponents?" の構造 (6). 北大文学部紀要, 36-2.

Keenan, E. O. and Schieffelin, B. (1976) "Foregrounding referents: A reconsideration of left dislocation in discourse" *BLS* 2.

Kruisinga, E. (1932) A Handbook of Present-day English II Noordoff.

Magnera, G. (1984) "Semantic and grammatical aspects of hypothetical verbs" *Lingua* 12.

Mathesius, V. (1975) *A Functional Analysis of Present Day English on a General Linguistic Basis* Mouton.

松浪　有 (編) (1988) 英語学コース2『英文法』大修館.

宮崎清孝・上野直樹 (1985) 『視点』認知科学選者1. 東京大学出版会.

村田勇三郎 (1982) 『機能英文法』大修館.

Nakajima, H. (1982) "The V system and bounding category" *LA* 9-4.

中島平三 (1984) 『英語の移動現象研究』研究社出版.

Newmeyer, F. J. (1987) "Presentational *there*-insertion and the notions 'Root transformation' and 'stylistic rule'" *CLS* 23.

岡田伸夫 (1985) 『副詞と挿入文』新英文法選書, 大修館.

Palmer, F. R. (1988) *The English Verb* Longman.

Quirk et al. (1976) *A Grammar of Contemporary English* Longman.

_____ (1985) *A Comprehersive Grammar of the English Language* Longman.

Ransom, A. N. (1986) *Complementations: Its meanings and forms* John Benjamin Pub. Company.

Reinhart, T. (1976) *The Syntactic Domain of Anaphora* MIT Press.

Rochemont, M. S. (1985) *A Theory of Stylistic Rules in English* Garland Pub. Inc.

Rodman, R. (1974) "On left dislocation" *Papers in Linguistics* 7.

Ross, J. R. (1967) *Constraints of Variables in Syntax* Indiana University Linguistic Club Publication.

_____ (1973) "The penthouse principle and the order of constituents" *You take the high node and I'll take the low node.*

Teller, V. (1978) *The Syntax of Leftward Movement in a Transformational Generative Grammar of English* Doctoral Dissertation.

Ward, G. L. (1988) *The Semantics and Pragmatics of Preposing* Garland Pub. Inc.

安井　稔 (1978) 『新しい聞き手の文法』大修館.

_____ (1987) 『現代英文法事典』大修館.